

乳頭分泌物が発見の発端となった非浸潤性神経内分泌癌の 1 例

畠山重春¹⁾，和泉智子¹⁾，小松明男²⁾，土屋眞一³⁾

サイバ[®] リサーチセンター¹⁾，慈生会病院病理部²⁾，日本医科大学付属病院病理部³⁾

はじめに：乳腺神経内分泌癌（E-DCIS）は乳癌取り扱い規約では、その他に分類される稀な腫瘍である。分泌物細胞診が発見の発端となった症例を経験したので報告する。

症例：75 歳、女性。左乳頭血性分泌物を認め来院。腫瘤は触れないため分泌物の細胞診検査を施行。

細胞診所見：血性背景に変性の加わった小型細胞の少数は孤立性出現の他、乳頭状構造を示唆する集塊として認められた。小型で細胞間の多様性に乏しいが、N/C 比が高く、相互封入像やクロマチン増量を認め、悪性疑い（Class- ）とした。2 回目の分泌物細胞診でも類似所見が得られたため、組織学的精査を希望した。乳管摘出組織の病理検査により最大径 3mm の E-DCIS であることが確認された。

肺スリガラス様陰影の経過観察中に出現した悪性胸水と胸膜多発性結節病変の 1 例

新野 史¹⁾，山仲一輝²⁾，坂本和裕²⁾

独立行政法人国立病院機構横浜医療センター臨床検査科病理¹⁾，同呼吸器外科²⁾

【症例】胸痛を主訴とする 65 歳男性。左肺下葉に径 11mm のスリガラス様陰影が認められ、4 ヶ月後に左胸水と左胸膜多発性結節病変が出現した。胸水細胞診で悪性中皮腫の可能性を示唆したため施行された胸膜生検で上皮型悪性中皮腫、肺病変の摘出生検で細気管支肺胞上皮癌(野口分類 A 型)と診断した。その後左胸膜肺切除が行われた。

【胸水細胞診】粘液様物質が多量に見られ、集団状ないしは孤在性で胞体がライトグリーンに濃染する大型異型細胞や多核状異型細胞が認められた。

【組織診】肺病変；1x0.7cm の淡い灰白色腫瘍で、立方から円柱状の異型細胞が肺胞上皮置換性に増殖しており、TTF-1 陽性、Ber-EP4 陽性、カルレチニン陰性であった。胸膜病変；臓・壁側胸膜には 3x2x1.5cm までの結節が所々に認められ、乳頭状ないし管状～小嚢胞状、時に充実性の異型上皮が増殖しており、Ber-EP4 陰性、カルレチニン陽性であった。

骨外性粘液性軟骨肉腫の一例

黒田陽子，手島伸一

同愛記念病院研究検査科

症例は 51 歳女性、左臀部の腫瘤、疼痛にて来院した。穿刺吸引細胞診にて円形細胞肉腫の所見であり、胎児型横紋筋肉腫、ユーイング肉腫などを考えた。続いて施行された生検では小型の比較的単調な腫瘍細胞が粘液性の間質に小充実性ないし索状を呈して増殖する像で、骨外性粘液性軟骨肉腫(EMC)と診断した。摘出された腫瘍は 20x10x5cm、分葉状で断面は粘液性の光沢を有していた。術後穿刺吸引細胞診を再検討し、特徴ある粘液性背景などから EMC も鑑別診断として想定可能であったと考えた。本症例は 3 年後に局所再発、肺多発転移、10 年後に脳転移をきたしたが、手術、放射線治療などを行い現在も生存されている。遺伝子学的検討を行ったが、EMC に特徴的とされる遺伝子異常は検出できなかった。

標本についての考え方、本症例の染色体異常などに関し、ご意見を頂きたいと思います。